

「農業生産性改善」

7月30日付の日本経済新聞の朝刊第1面に「農業生産性、群馬改善 高付加価値品へ転作進む」の見出しが躍っており、思わず目を引きつけられた。「データで読む地域再生」なるシリーズで農業を取り上げたものだ。

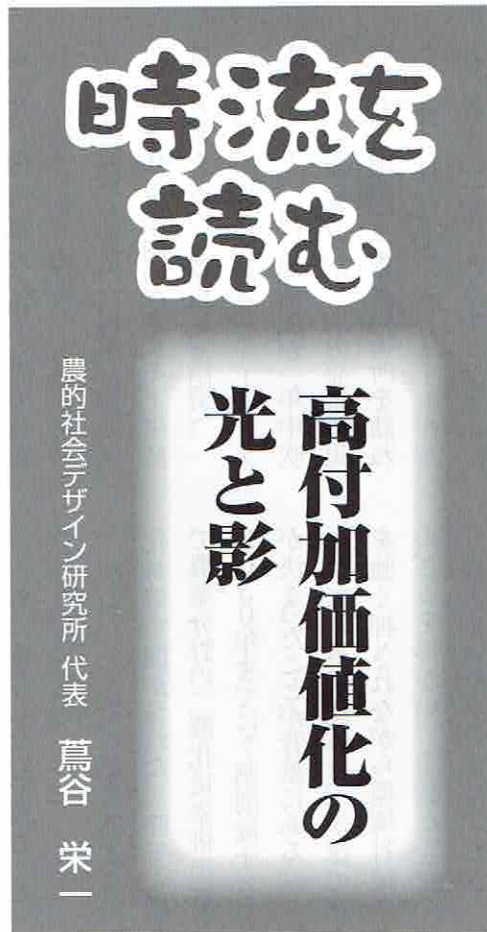
記事は、耕地1ヘクタール当たりの農業産出額を都道府県別に算出し、2005年から20年にかけての増減率の比較を行っている。全国平均では9.1%の増加となっているが、最も増加率が高いのが群馬県で31.6%、これに山梨県が29.0%、長野県が26.7%で続く。群馬県については、キャベツの契約生産への注力、カット野菜向けの拡大、県内JA等が連携しての通年出荷の確立等をその理由にあげている。

筆者が週末、畑仕事に通う山梨県については、ブドウでの巨峰からより単価の高いシャインマスカットへの転換が大きいとされる。大田市場での21年取引価格はシャ

インマスカットは巨峰の1.7倍の水準にあり、10年代半ばから増加し、18年に販売額で、20年には出荷量でも巨峰を抜いたとある。

拡がる価格差

自らの畑にはない野菜や果実を



めていた巨峰は700円。昔ながらのデラウェアは15房入った箱で2300円と、一房当たり167円。それぞれに一房当たりの重量は異なり単純な比較はできないが、新しい品種ほど単価は高く、かつ品種ごとの価格差は拡大している。

購入するため、毎週末、近くの直売所に足を運ぶ。8月6日の販売価格はいずれも一房で、一番人気のシャインマスカットが1500円。大きな粒が特徴で人気上昇中の藤稔は1500〜2000円。数年前まで最大シェアを占

ぶ量はわずかで、購入する人も少なくなっているようだ。
所得増や担い手確保に跛行性

このようにブドウの高付加価値化はすすんでおり、勝沼周辺では農家の所得も増加し、また新規就農が増えており、農地がなかなか手に入らないという話も耳にする。ところが山間部では高齢化の進行と家族労働力の減少によって外部労働力への依存を強めており、その調達にずいぶん苦労しているようだ。さらにお手伝の人は一定時間を過ぎれば帰ってもらわなければならないやっておかなければならぬ残った仕事は、結局園主が老骨に鞭を打ち打ち片付けているのが実情だ。

ブドウが品種改良され高付加価値化していくのはうれしい話であるが、消費者の立場からするとブドウはぜいたく品となり、日常的に食べるものではなくなりつつある。昔ながらのデラウェアやベリー等もなくはないが、店頭に並

高付加価値化が進んでいることは確かだが、地域により、農家によってその影響はまちまちである。高付加価値化で担い手の確保を期待したいところであるが、途は半ば。高齢化・担い手不足の構造的課題の解決にはまだまだ時間を要するようだ。現場の悩みは続く。